

明治元一坊 奇聞知 859



前篇  
松延出棒

愛知明治天一坊前編の序詞  
 源日淀き名徳川の落流ありと傍りて天下を望む天一坊の筆ふ倣  
 うて明けく治まる聖代の法網を潜りたき葵の假紋付坊前  
 末添の華族とるせめけ濡手で粟の五千圓をの旅店の表三階  
 赤まへと貸借の取し茶の湯のお茶を濁せ謀畧裏へ廻れ  
 裏階子の造化精妙と舌座り幕外睨みの引込際曲漢を告  
 訴され且妻を裁判不白湖を黒白對決の世に珍し政務を去替の  
 需お任せく迅速が揚と一夜湊忽卒の間に綴り畢舞しぬ  
 明治十六年仲夏 物の本の作者 荅笠文京記而



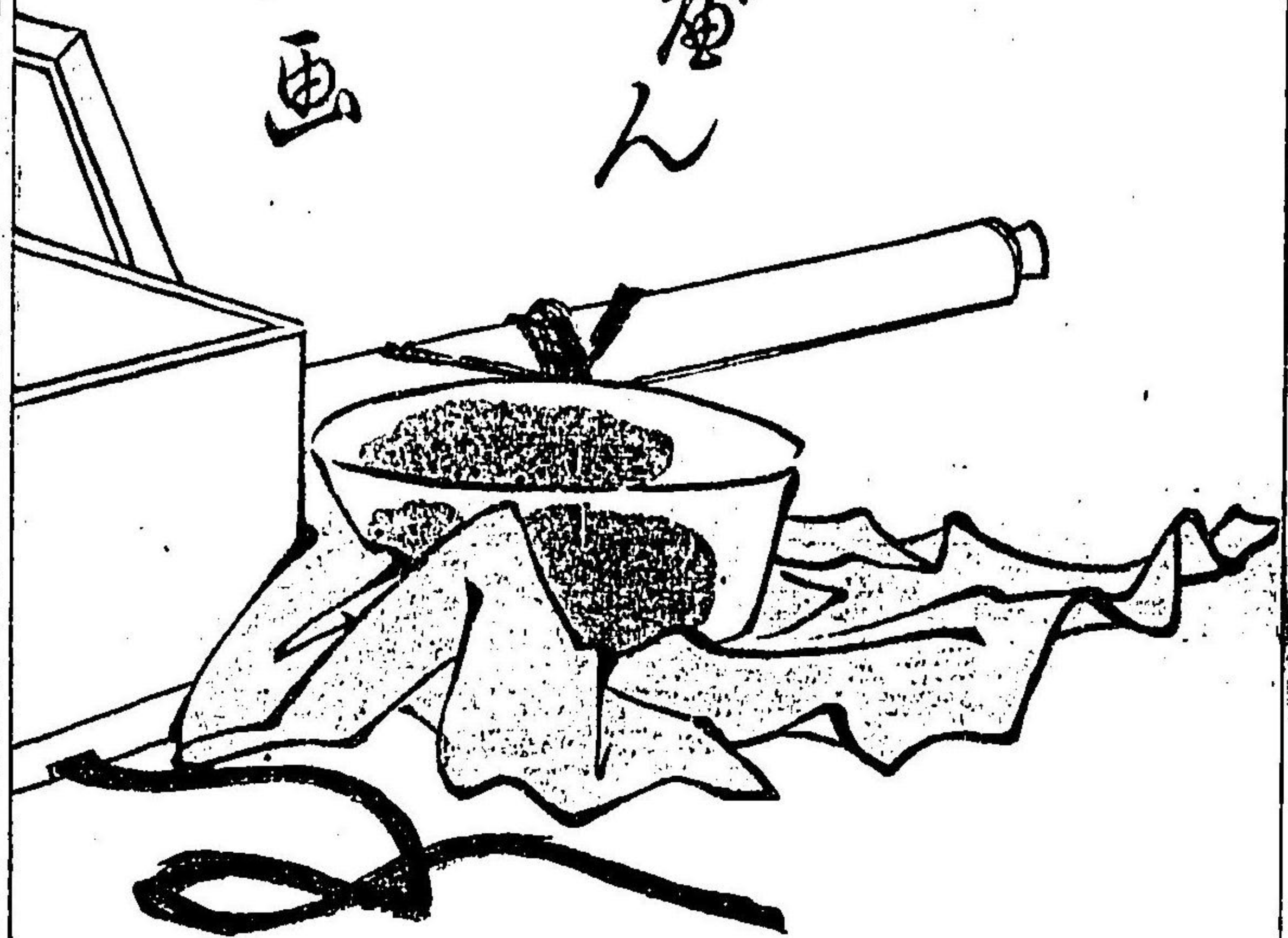
明治

天一坊

茶壺

文京路

國政画





よみせめ 卯の辰治十一年四月十日の暮  
 啓居の多き屋敷の旅人者紙屋を  
 十節々の店先へ入力なめてのつてくる  
 二人はの儀のゆりつるも左の形  
 五老の宿に金銀を閃めしむに華画を提  
 げといとさきに入り来るそのる紙屋  
 ひととも安んずれば奏任の上  
 あつた華換の何れも海上  
 者と



上 なる上  
 写 写の  
 通 通  
 せらお  
 茶  
 と  
 大 大  
 村 渡



二見講  
 旅人宿 紙屋 彦十郎  
 本々講  
 一心講  
 真誠講  
 諸國宿泊

よ かん 又

お湯  
 又

つぎにこれはいれが湯あがらぬおぼろの湯  
 椀で飲むまじりなきはな二つの物も二相ありとい  
 と重ししくゆまへに相しきまへ鷹揚ふらふべ  
 と相あつた論とまねの美十郎の威  
 さまのへんかたひに相れたる相もさへ  
 るあいの仕度なれど思念を存するも  
 ずきやう打拍子とまねと相ま  
 本後の袂とまねせよまねはたか  
 十郎と相いりて相まね  
 湯又早し小樽あり  
 我く二つ湯地へ来り  
 来り相まねりて  
 白火を辨れんご



▲イヤヤ相まねさう  
 うひさるる僕もそ  
 のまへに相あれた  
 又まねのまねの  
 ら入のまねに相まね  
 家次郎を今打拍  
 せよのまねを  
 世とまねまね  
 らまねのまね  
 らまねのまね  
 小まねのまね  
 まねのまね

あとの洋小  
 折入て客  
 おむね細あ  
 已開の他  
 玉ふもゆは  
 作柳を今  
 一人が村  
 氏侍へる  
 休はま  
 振るまへ  
 言するな  
 すのほ  
 今さ

おけ  
 せよ  
 次





つぎ  
 松平慶永の  
 子にありてお  
 よきす  
 ありてお後  
 おおに  
 りてあり  
 究てか  
 香かじ  
 難し  
 香はれお  
 包みまく

二つ二つ  
 うらな  
 びそ  
 と  
 と  
 旧幕府の旗  
 中  
 博家

※よびるもの  
 中へ是の河下へ幕府の旗を  
 約二千八百石の倉庫を納じは辺に  
 田舎の  
 室敷  
 百人を  
 村  
 若根  
 と



よき方一俣我々も打搦を奉りしハ  
 源き子細のありてあり  
 徳川慶永の倉庫ありて松平慶永と作  
 せられ一時は令校を築のは身なりて特にお  
 さく並ぶものありしが時運一変  
 して皇政復古となりて後には倉庫慶  
 永に休むて静養の地お返るを  
 松平慶永 月香花を友として世のちり  
 をてけしをては世の人等には  
 さあぐも周備のあぐとあ  
 と念に之ををては世のちり  
 のさあぐも倉庫慶永のちりて世の  
 公益をひね起し天下の眼を驚かさんと



つぎ 慶長は始末の旧  
 仕度より殿方の儀  
 舟を疎集おし出地へ  
 一の勢大なる船は夜更  
 を渡計おひ先られを  
 足分の為一足とせぬ  
 されはあは後よりお出の船  
 合下りといえおもいふは火  
 子細のあらおもぬねの大畧  
 りのどのお追他をいん  
 玉用でと家老実ていひ  
 られは表十段のうらおとらねさ  
 らさるるのあ



目上 <sup>あか</sup>  
 目上と換  
 扱たかぐ出て  
 目上合せ完ホ  
 目上の袴くおて  
 紙表方めて旧物家  
 衣の内舎牙がた入ふ箱  
 もあぬ取たそものりか  
 一もきといなぬ取とハ

△俄 <sup>やい</sup>  
 俄 <sup>やい</sup>  
 を

方と表 <sup>ふた</sup>  
 不教の <sup>ふた</sup>  
 表 <sup>ふた</sup>  
 く <sup>ふた</sup>  
 も <sup>ふた</sup>  
 靴 <sup>あひ</sup>  
 築 <sup>あひ</sup>  
 表 <sup>あひ</sup>  
 飾 <sup>あひ</sup>  
 付 <sup>あひ</sup>  
 を <sup>あひ</sup>  
 取 <sup>あひ</sup>  
 今 <sup>あひ</sup>  
 吹 <sup>あひ</sup>

國邊と  
慶義の羽  
若を侍  
家肉の混  
雑免角

うちあ  
その  
春二月  
初旬とまりのふ  
本系より  
後系より  
陸路を走る



おたは  
種中その  
形生威儀  
とひく  
後けの序  
云の家  
換示  
服由振だお通り頼  
老十郎夫婦の老改めく

はくの肉は死  
はあわ下との  
報知のり紙巻の  
主人を治めたの若月  
お掃ひて兼て茶室の  
目せは様へおまて出  
深ひふりところ深く  
慶義の二七八人か  
車あまなる小途一う  
斬時日所お休足の上  
お連て休考方へお  
ありふ何なる慶義の  
は舎来とも思しく



お掃ひて兼て茶室の  
老十郎夫婦の老改めく  
おたは  
種中その  
形生威儀  
とひく  
後けの序  
云の家  
換示  
服由振だお通り頼  
老十郎夫婦の老改めく



つと招き過しけり拙者の○ま箱の裡より一箇の相の箱とぬせ  
 家持の箱は南家も洋在色  
 あつた世に産みあひのまう今  
 殺拙者と思ひまへ彼の件  
 おもひかあるより深く  
 心も満ちたり尚びうへ  
 由は後の及力偏ふ  
 れむとたけけきば  
 まう十郎まはつた身か  
 餘る面白と顔と  
 更におさう付て  
 平佐をさかへる承  
 の傍におりー○

先相家産いふ三州の漢陰  
 まきけ用ひるひ  
 以東碗あて家まへ  
 の置われど今回  
 上産のしほまこ  
 生伴あせりまこ  
 わりければま十郎の  
 ありまへまかまか  
 有難うあま田押  
 戴さゆそめま  
 至まはりて女  
 身法共彼の

△印  
 産の終  
 ちり又かく  
 結納の帛  
 巾も縁  
 まじうが  
 たふいが勿  
 休まぬ家  
 産のいふま  
 福もいふま  
 切ははれま  
 賢承名と原ま



箱を扱いて  
 中と探さる

神宿する  
 一個の東碗

おど孫計あの中  
 きつと入密しき  
 合衆も表あせ

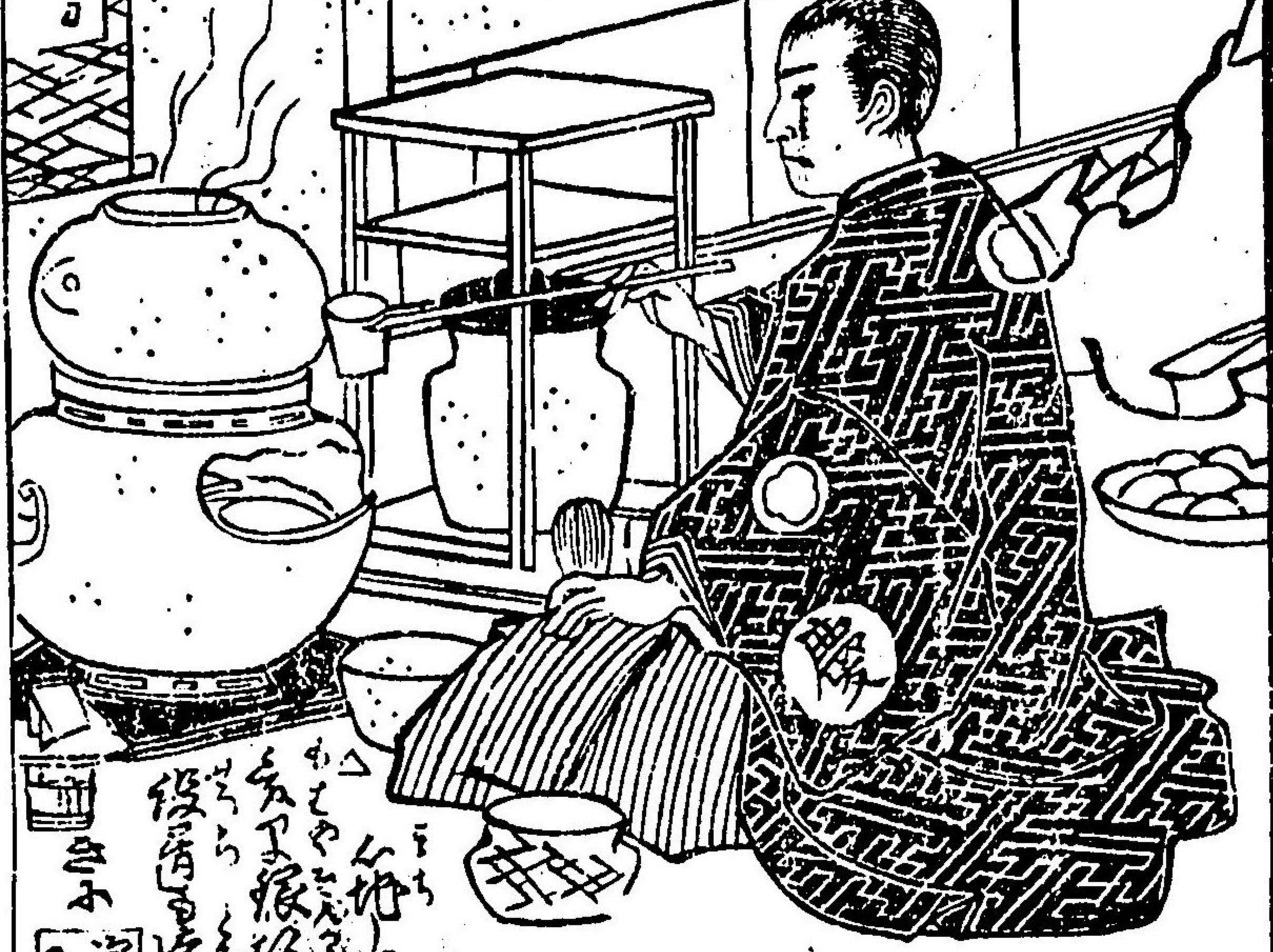
尾三郎

毎日本酒買と  
 催しつ非た不  
 奏後を極めし或は去り弟を  
 招ぎ穿生許を呼び一八の  
 依みわらび兼七村  
 依辺のあふりも内儀  
 せし通り今四柱考が  
 累ひ付し之當世へ一の  
 振付と没多きるわら  
 てハ先小大坂の喜喜も  
 佐友吉丸(領け  
 進るる方田の合



浪の取  
 歸れ来む所  
 存多かかゆふ  
 取保つるうと  
 井き公家重た  
 十弟の在ふこと  
 大方るらび洗  
 の如に世若めりる  
 大任を仰せ付らる  
 こと重小男よとて  
 この  
 井上るさ幸と重  
 そのた  
 生助小ては保る  
 といま  
 や大合を催け

退く利息出まらりてお今をえ  
 六力あし由小てこれの由り  
 任名の一等を代本村平次弟が  
 捺中せし腕うまぬり冠文  
 あまが孫く没置の存小なり  
 先びの金を取し寄て返す中弟の  
 礎と返うして兄慶喜より受取り  
 量るる十方田の合小華族中より  
 兼集まらるるの  
 全きると合されが  
 四十二回方田小  
 るるも本世の  
 弟ハを伴との



段寄る家  
 へ



# 礼 儀 中



華美なる装束のたゞなるを以て

格と云はざるをたゞしては後わて

のせと夫れ十年のあて止るるを

せざるにせざるは件も重なる通

格若くは國の下向へ

いとの心の後を徳の

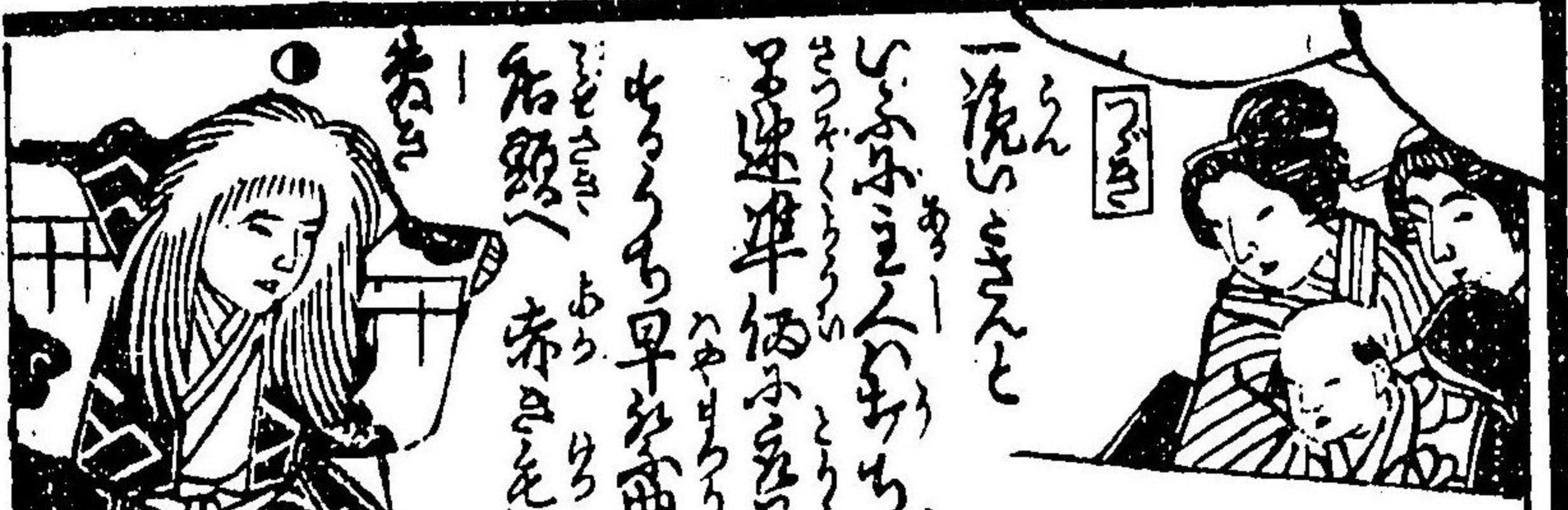
種集まるる所なき

え考の修り守りてぬ

事から外の祭典の由

に委せざるは免れぬ

の程を定むれば



一流のまゝと  
いふ事人のあつち其の家内考分  
子孫準柄ふまざるを素へ格と格ひなま



● 連れ金屏風

後兼せりる物の格と格ひなま

内の若くは格若の若若格若ひなま

いふ事人のあつち其の家内考分

子孫準柄ふまざるを素へ格と格ひなま

いふ事人のあつち其の家内考分

子孫準柄ふまざるを素へ格と格ひなま

いふ事人のあつち其の家内考分

子孫準柄ふまざるを素へ格と格ひなま

いふ事人のあつち其の家内考分

子孫準柄ふまざるを素へ格と格ひなま

村長海運... 備て後けの岸(遠きぬ)  
 柳由虎か名古と(つり)  
 本海牙一の(ね華)  
 東家より(上方)旅行  
 北の(何)も(は)積(ひ)て  
 解(た)け(た)る(ふ)も(も)

東照神...  
 長... 山... 時...  
 宗... 諸... 人... 輩...

花... 前... の... の... 上... 平... 食...

作... 馳... 性... 光... 用...

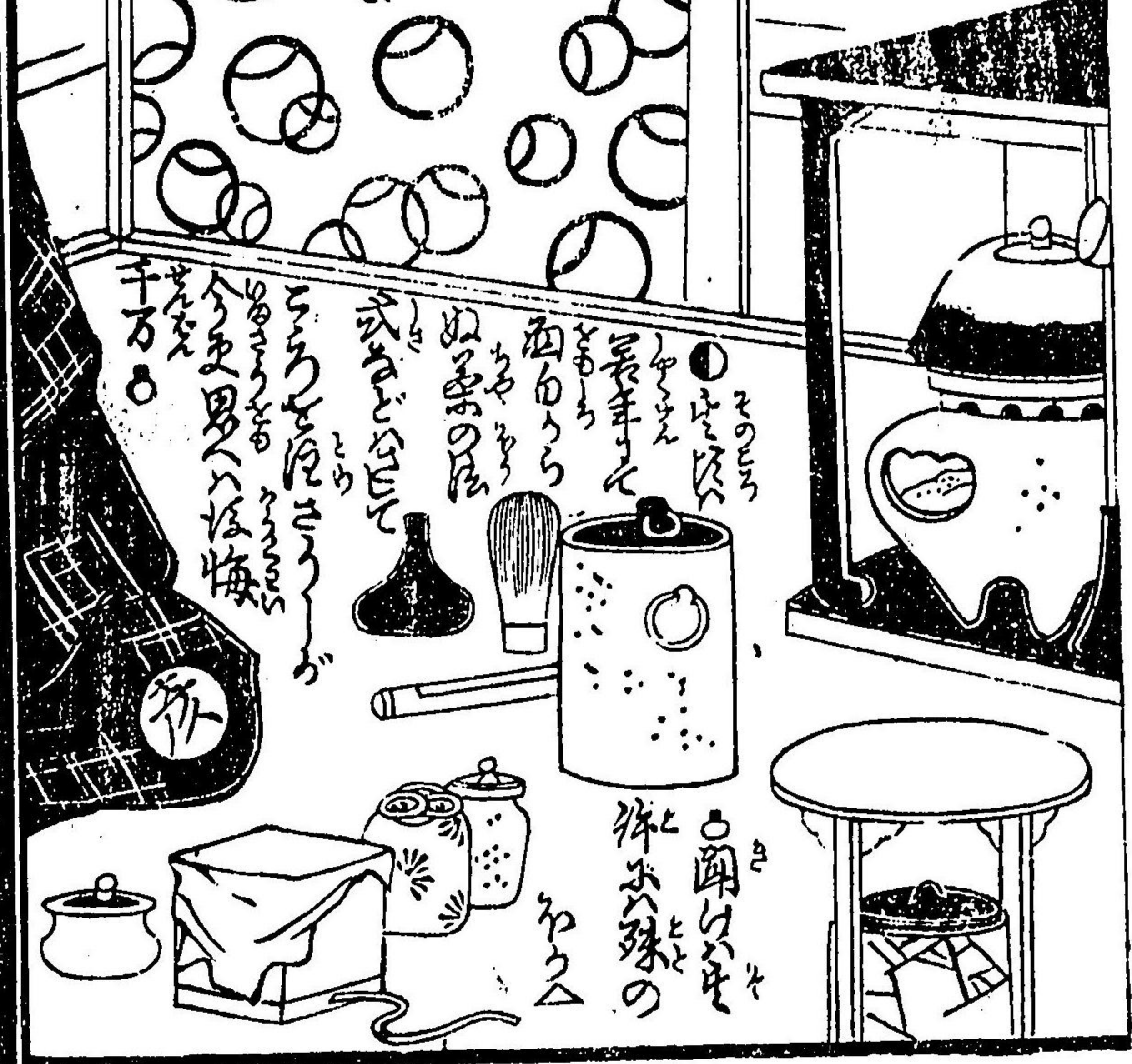
纏(むす)んで(切)ら(ま)る... 波...  
 解(と)ける... 有(あ)る...  
 大(お)きな...  
 欠(か)け...  
 不(ふ)打(う)り...  
 主(ま)い... 子(こ)... 供(く)...  
 如(ごと)く... 如(ごと)く...  
 見(み)物(もの)... 見(み)物(もの)...  
 正(ただ)しい... 身(み)...  
 こと(こと)は... 備(び)...  
 佐(さ)川(がわ)の... 紀(ぎ)... 海(うみ)...  
 家(か)康(や)の... 大(お)は... 坂(さか)...

梅(うめ)... 焼(や)け... 産(う)る... 村(むら)...  
 赤(あか)い... 青(あお)い... 黄(あう)い...

乃(乃)名(な)一(一)王(王)次(次)

月天

園に走りて下女を焼飯を  
 梅ら三々を合と混雑た方なら  
 さりその向を屋敷の御紙  
 祝をまうきせり書箋紙の  
 元切の東窓宮を度と  
 孝太子書さ徳ゆきの奥  
 深さ酒へ貼らせゆて中と酒  
 押一重りて焼折の梅をみ  
 舟とゆりゆ免角をさうらふ  
 山東由酒りな忘れゆこと  
 きく梅けきさる百よりり  
 何々酒のさまてとて  
 染しん色と玉を



疑せしが先未ま人先十第の  
 干の利休を流れを汲む西  
 系の人入梅川家室をさる  
 由の白ん人ささる梅川心  
 人をさるて古代の系若もま  
 雨持さるゆるれたる十第の  
 谷とをさるて世系乃の系若  
 梅をさるて世系乃の系若  
 梅をさるて世系乃の系若  
 梅をさるて世系乃の系若





〇頭掛い梅で何かして九折の  
 〇不浄とあるうらみの不浄  
 〇手前をい後おれ  
 〇らんこの好のなとと辞退  
 〇やらせれて所持の  
 〇呉一切を都び  
 〇慶承が居るの  
 〇室へ入り  
 〇付け素の  
 〇素をい何  
 〇何から向  
 〇からの慶承  
 〇をい

〇田山来ない  
 〇まがこれ一  
 〇再び慶承の  
 △まえ  
 △まえ  
 △まえ  
 △まえ



〇用む  
 〇あそび  
 〇お目と  
 〇送り居る  
 〇多分より珍  
 〇客のいらせこま  
 〇若るふぞき  
 〇慶承がふ  
 〇ありや  
 〇珍客といはれ  
 〇と急を  
 〇と急を  
 〇と急を

〇通  
 〇一ねと看  
 〇十弁  
 〇飲て  
 〇きり  
 〇宗  
 〇吸び  
 〇あぬ  
 〇金  
 〇世  
 〇横  
 〇か

天や終て事あるより人の心由  
 優長ふあり一時令こく廢れる  
 茶の湯も返り流るるしお茶の  
 華紋方なども亦ら茶の湯を  
 遊ばさむる東ある物  
 は指南と作せ付らる  
 向も少あたらねば  
 節は空か慰まふ遊ばさむて  
 物行と怒るういひけれが廢る  
 ぬらぬ敷おてたもありん  
 系統の流るる王様のあり  
 去此どけありて昔より今も  
 遠



風流の流るることる人終る  
 ありて只月ふさるるを  
 廢を遠く避け優けけの  
 世を送らるる貴族のごとき  
 實小義ま一物おもまひ  
 商家の主人か茶たふ  
 精しと園し由名澤在中の  
 慰みふ生の法式を修習せ  
 りり貴和よ由名まはとれなくば  
 三日も遠隔ありて何かん修習を  
 此の  
 我みりると云へば宗やん  
 畏こまりゆとせ修習せ  
 くれりく  
 修習中







田まけー申  
 變ふに...  
 前何...  
 揮毫...  
 必ひ...  
 いひ...  
 承知...  
 不...

或日...  
 かり...  
 近...



べし...  
 倭...  
 賢...  
 一...  
 さ...  
 二...  
 松...  
 柳...  
 勢...  
 せ...  
 ら...  
 菊...  
 秋...

疾...  
 け...  
 わ...  
 海...



如きこと

先づ

急して



⊙目的を果せんとおぼへて一決し、先ず  
 一決中のこととて、是れ一決の系せぬが  
 由るに、ぬて、地(ま)くらん時、まゝに  
 心とまゝの、代を、の、み、を、格、を、料  
 を、拂、り、せ、れ、と、十、八、は、用、せ、ら、る、人、不  
 せ、ま、ら、ん  
 こととあらば、  
 一、一、催、進、を、ま、ま、に  
 中、ま、ま、と、ま、ま、の、日、ま、ま、の、ひ、れ、ま、ま、に

先ず急をせしめし一決す

中ま出入せし一決す  
人が供とも一決す  
車を送りて執田決す



以月所の發行をよて一月  
 離別の宮を弄ま一がけの  
 入費をよて先十郎がまゝに  
 争のうへ静なるる慶承等のの郊  
 せを人力車とて先十郎がまゝに



このことゆゑ早速速速去らるる  
 車はと名を雇ひ車の  
 準備もひと箱のひらひ  
 見送りの悲しきトリス  
 唯とよて引返す  
 一人先十郎のこと  
 先のおもたるる芝居  
 中を先送りし(⊙)



⊙再金を約して西と東一  
 袂をとりちぬりて  
 急承等の一ひらひ  
 急用の出来しとて  
 静まきと雇ふる  
 車夫をばおよりうえ  
 せ一引ハメを外し  
 ぐんが相持はる(次へ)



拙者の奥  
 くらーさの地  
 男とおー飛ぶがまら松平の  
 復讐承が目的の通り大高くと  
 十分甘く行そらうごとおめけ  
 吐ー小鳥を燈石ー只此の  
 上の老十弟を熱ー  
 込みジ、トリ仕  
 事とセニヤア  
 みるぬと大獲ふ歌の  
 曲者が二人私うみ耳結き  
 のひ生翌日へ遠か後松る  
 大味屋お宿をとりにてけれより

書送る  
 日ひ  
 空さう



紙小光の札を細くと  
 書き認めて後方へ送り尚望と入  
 静あるる兄慶春公の邸より看き  
 スー振みて兄公は對面を報行  
 後立のお儀ものと都合よく細か  
 こまば左様あんりてまへーと  
 るさ大法理と  
 老十弟方へ

村  
 知りあか  
 下谷池の端仲  
 那の御田を止  
 うまえ改へ



正宿といひ入るま  
 内家にてハ移る魚  
 漢と云ふはあつら  
 ねハ早迷ふ知し  
 二階の一室を貸して呉  
 このせこ人ハあふま  
 ようハ甘くゆきま  
 始めとて家内の老  
 残りまゝ儘内家の  
 分家と心はわ  
 通つてハも若  
 がよハとハあふま

日毎て寝ね  
 来ハ全谷  
 全救ハんふ  
 居て終  
 おつちをお  
 て扱ハ儲  
 何事といふ  
 男ハあふま  
 と扱ハ儲  
 住居あてあり  
 ことた後由あく物  
 彼由共願感著  
 この入ハ

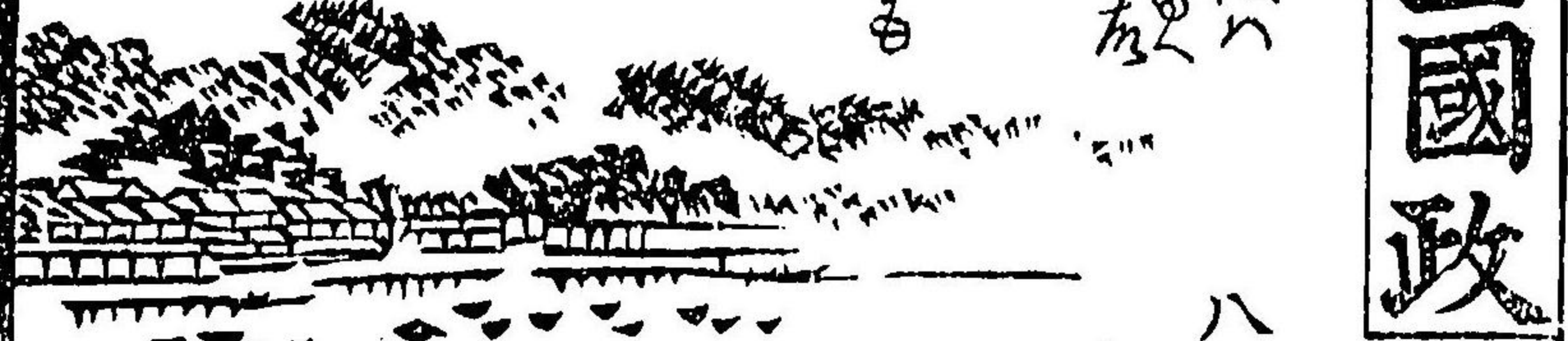


一ツハ後家氏の人  
 と男振ガトウハ  
 りんハあつら  
 芝居の末家ぢや  
 あつまのハを  
 緑由ハ著  
 此圖ハ徳川  
 八代の治世奸賊  
 天坊坊山の内  
 伊賀助赤川大膳  
 藤井左京常樂院  
 天意ハ神計ハ議スル

酒肴を  
 とりあせ  
 秋の砂の  
 ところハ  
 免角祝ひ酒を  
 ぢやアねハ  
 夫より  
 酒肴を  
 とりあせ  
 秋の砂の  
 ところハ

# 画工梅堂國政

百五ひそめは後ハ  
拙者の約あるを  
更よ先つうひし  
りある世の情を  
るいそげといふ  
ことあるははは  
客の冷ぬうち  
次之幕をわけ  
ねるるりのぬが  
就ては僕の考へ  
よりの扱ふ



●まれば  
十  
八九仕  
そんざう  
まへ  
あるま  
あひのま  
を再修  
わけバ  
三人  
ともよ  
あつち  
いり



□そきそそ  
子ことおめ計  
孫のまむせ  
知らざう  
ける  
明治天一坊  
實記前編  
終

定價拾錢  
芝區日蓮町丁目番地  
編輯 渡邊義方  
出版人 大西庄之助  
明治十六年七月廿四日

遊覽縣令常盤布施譚  
美談

松林伯用殿  
梅堂國政画

雪の梅女庭訓

梅の門當齋編  
梅堂國政画

北廓花城紫

春亭史彦作  
梅堂國政画

手鞠歌笠守於山

春亭史彦撰  
梅堂國政画

雪月花三遊新話

藤田仙翠録  
梅堂國政画

花雲湧草詣

梅堂國政著  
歌川國梅画

赤城磯大石真傳上下

三平  
東傳 西路冷華野の秋風全

大岡記 石山軍記全

大岡記  
石山軍記全

大高原吾雅八傳全

天野屋義烈傳全

川中島合戦

十冊  
梅堂國政

神奇寺五郎誠忠美記全

佐倉宗五郎實傳全

賤ヶ嶽七本鎗

上下

堀部安兵衛三回復讐全

鬼和尚  
清吉兜悪傳月禮全

水間記山崎合戦全

水間記  
山崎合戦全

赤坂酒徳利下戸の自雲全

六三  
三世相夢囈全

耕雲齋武田の軍配

六冊

村松三太夫柱切之傳全

あま  
三樓重昔八丈全

日本軍記

十冊  
梅堂國政

四野會若 西路情意忍路全

あま  
三結文情實説全

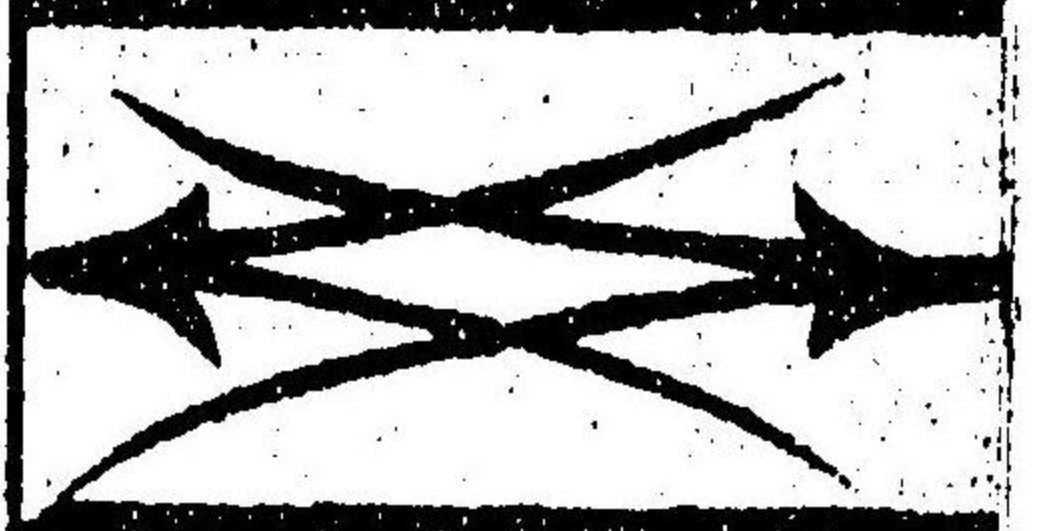
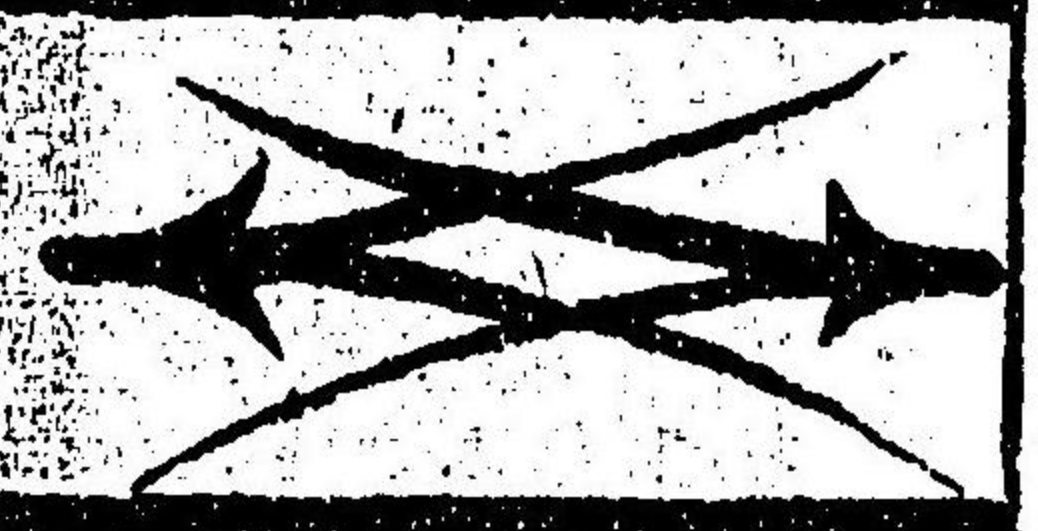
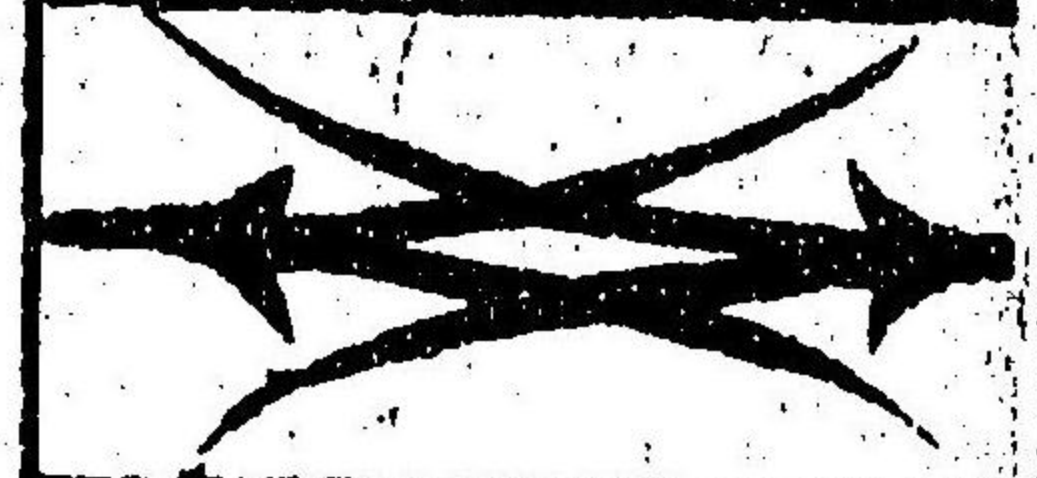
一代記切付物

あま

○ 地本 問屋

中しが松  
伊勢屋  
大西庄之助版  
東京日本橋區松島町水天宮前  
おまぶろ

繪双紙



特42

859

明治天一坊 奇聞知

捕

國改

前  
松  
延  
堂  
梓



091472-001-6

特42-859

明治天一坊 (愛知奇聞)

渡辺 義方 / 編

前

M16

DBN-2439

